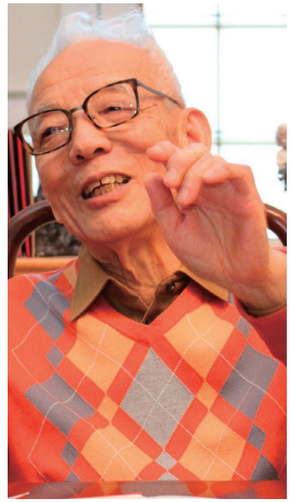
まずは、科学的根拠に基づき、現状や原因を正しく理解すること

真鍋 淑郎（まなべ しゅくろう）



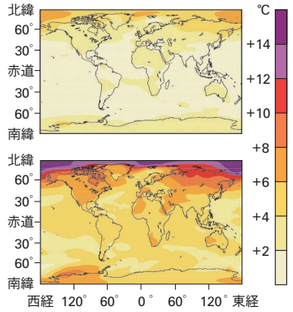
上段

① 私は、気候の変化をコンピュータで再現する「気候モデル」を使って、地球温暖化について研究してきた。

② 私が研究を始めた一九五〇年頃には、「気候は安定したもので、一時的・局地的な変化はあっても、人間の活動によって大きく変化することはない」という考えが主流であった。しかし、世界各地の観測データの収集や気候モデルの開発など、地道な研究の積み重ねにより、気候は、大気や海洋など、さまざまな要素が複雑にからみ合ったもので、ささいな変化が急激な変化を引き起こしうることがわかってきた。今や、人間の排出する温室効果ガスが原因で、地球の気候が大きく変化しているということは、疑う余地がない。

③ 産業革命前の千年間ではあまり変動しなかった地球の平均気温は、その後、二〇二〇年までの間に、既に一度ほど上昇している。気候モデルの計算によると、このままでは今世紀中にさらに二度ほど上がり、温暖化は海上よりも陸上で、熱帯よりも北極域で著しく進むと考えられる。

中段



産業革命前と比べた気温上昇の予測。上は大気中 CO_2 濃度が２倍に（2050年頃までになる見込み）、下は４倍になった場合。

下段

④ また、温暖化は世界の水の循環にも大きな影響を与える。洪水や干ばつが増え、水資源の豊かな地域と乏しい地域の格差は、さらに広がるだろう。これらの予測は、実際の観測データにも表れ始めている。近年、世界各地で洪水や干ばつをはじめ、酷暑や豪雨など、異常気象による災害が相次いでいる。

⑤ 温暖化がもたらす被害の大きさは、地域や世代によって異なる。そのため、問題への向き合い方にも温度差があり、今なお、「地球温暖化は起きていない」と主張する人もいる。しかし、問題の認識そのものがずれていると、解決は難しい。まずは、科学的根拠に基づき、現状や原因を正しく理解すること。そのうえで有効な対策を講じることが、問題を解決するための第一歩である。

社会全体で解決できる仕組みを作る

伊勢 武史（いせ たけし）



上段

① 私は研究者として環境問題に携わっている。しかし、仕事帰りに立ち寄るスーパーで豆腐が十円引きだとちょっとうれしくなるような、ごく普通の市民でもある。そんな私たちが、無理なく納得して環境問題に取り組むために、今、何が必要だろうか。

② 環境保全というと、ごみ拾いのボランティアやこまめな節電、募金などを思い浮かべる人もいるだろう。これらの取り組みは、確かにすばらしい。しかし、このように個人の良心や自己犠牲に依存する社会では、地球環境は守れないと私は考えている。

③ では、どうすればよいか。個人に負担を強いるのではなく、社会全体で解決する工夫が必要だ。例えばスーパーで食材を選ぶ際、私たちはなるべく安くておいしいものを選ぶ。あたりまえだ。このような人間の「あたりまえ」を利用して、環境を守る仕組みを作るのだ。つまり、安くておいしいものを選んだら、最も環境によい商品だった、という状況を作り出せばよい。こんな都合のよい状況の実現のために「インセンティブ」という考え方が使える。これは経済学の用語であり、人々の意思決定や行動を変化させる要因のことだ。例えば、政府が環境によい製品に補助金を出すことで、その製品の価格は安くなり、消費者に人気が出る。逆に、環境に悪い製品には補助金が出ないので、価格が高くなり、あまり売れなくなる。このように、政策決定者がしっかりとインセンティブを実施すれば、「お買い得」みたいな言葉に弱い我々でも環境保全に貢献できる。

中段

④ とはいえ、「環境に配慮されていなくても、私はこの製品を選びたい。」という人もいるだろう。インセンティブは、そういった意見や行動も否定しない。選択の自由と多様性を維持したうえで、社会全体をエコな方向にもっていこうという考え方なのだ。

⑤ 環境保全のことを考えるときには、熱意をもって活動に取り組む人々に注目が集まることが多い。だが、世の中にはさまざまな考えをもった人たちがいる。そのような人にも通用するような現実的な仕組みが、環境問題の解決には求められるのではないだろうか。

下段

④ とはいえ、「環境に配慮されていなくても、私はこの製品を選びたい。」という人もいるだろう。インセンティブは、そういった意見や行動も否定しない。選択の自由と多様性を維持したうえで、社会全体をエコな方向にもっていこうという考え方なのだ。

⑤ 環境保全のことを考えるときには、熱意をもって活動に取り組む人々に注目が集まることが多い。だが、世の中にはさまざまな考えをもった人たちがいる。そのような人にも通用するような現実的な仕組みが、環境問題の解決には求められるのではないだろうか。

一人が踏み出す一歩は、実は大きな一歩

堅達 京子（げんだつ きょうこ）



上段

① 私は長年、テレビ局のプロデューサーとして環境問題をテーマにした番組を制作し、専門家や企業の担当者に取材を重ねてきた。

② 今、私たちは地球温暖化をはじめとする深刻な気候危機のただ中にいる。科学者たちは、目前に迫る二〇三〇年までに二酸化炭素の量を半減させなければ、温暖化の進行はより早まり、被害が深刻化すると警鐘を鳴らしている。

③ では、温暖化を止め、地球環境を守るために、私たちに何ができるのだろうか。世界各地で取材を続ける中で、私がたどり着いた答えは、「市民一人一人が行動を起こすこと」だ。

④ 気温の上昇を止めるために、すぐにでも取り組めることは、たくさんある。電気をこまめに消すこと。自転車や公共交通機関を使うこと。木を植えること。マイバッグを持ち歩き、プラスチックなど石油製品の使用を控えること。

⑤ だが、そんな小さなことの積み重ねで、本当にこの状況が変わるのかと感じる人もいるだろう。

中段

⑥ 確かに、個人がこうしたことに取り組むだけでは、温暖化は止まらない。一人一人の直接的な力はとても小さい。しかし、もし膨大な数の個人が一度に行動を起こせば、どうだろうか。国や企業も活動の方針を変えざるをえなくなる。多くの人が行動を起こせば、間接的に世の中を動かす効果があるのだ。

⑦ 身の回りでも既に変化は現れ始めている。例えば、店舗の電力を一部、再生可能エネルギーに切り替えたり、商品の包装を削減したりする企業が増えている。私たち消費者が、持続可能性に配慮した商品を選ぶようになれば、企業の態度は変化する。一人が踏み出す一歩は、実は大きな一歩なのだ。

⑧ どんなに難しい問題の解決も、最初はたった一人が動きだすことから始まる。何より大事なのは、そのとき、「声を上げること」だ。気候危機を食い止めたいという熱意を「声」にして働きかければ、周囲の人々の行動が変わる。それはいつしか大きな流れとなり、企業を変え、社会を変える。一人でも多くの人が、環境問題を自分のこととして捉え、今すぐ行動を起こすことを期待している。